

2010.11.5. by Mutsu Nakanishi

11.

この秋 二つの弥生時代後期の製鉄関連遺跡 の 講演会を聞いて
 「阿蘇谷 大量の鉄を集積した集落 下扇原遺跡 と
 淡路島 西日本最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡」

熊本県阿蘇谷にも 弥生時代後期 鉄を大量に集積した鍛冶工房を持つ集落が出現し大和王権の成立過程で消えていった
 その出現と衰退は 淡路島に出現した西日本最大級の鍛冶工房村 五斗長垣内遺跡とよく似ている



弥生後期 大量の鉄を集積した集落群があった阿蘇谷

弥生後期の大鍛冶工房村 淡路島五斗長垣内遺跡

- 10月9日 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会
 「弥生時代の小さき鉄製加工具たち—阿蘇・下扇原遺跡の出土品から—」
- 10月31日 ふるさと発掘展「弥生の鍛冶（かじ）工房・五斗長垣内遺跡への道」（連続講演会第一回）
 「鉄と青銅—近畿弥生社会における鉄器生産—」森岡秀人（芦屋市教育委員会）



愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会

阿蘇谷 下扇原遺跡の位置

10月9日 久しぶりに松山 愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター第6回 アジア歴史講演会へ

いつも新しい鉄の知見を教えてもらえる楽しみな愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センターの講演会。

第6回アジア歴史講演会「『弥生時代の小さき鉄製加工具たち—阿蘇・下扇原遺跡の出土品から—』を聴講させてもらった。

あまり知らなかった北部九州以外の製鉄関連遺跡のシンポ。

知らぬことばかりで、阿蘇山の外輪山の中 阿蘇谷はベンガラの産地だと知っていましたが、弥生時代後期大量に鉄を保有した遺跡群があったこと初めて知りました。

弥生時代後期 阿蘇山の外輪山の内側の山裾 熊本県阿蘇谷のベンガラ産地に下扇原遺跡など鉄を大量に集積した鍛冶工房を持つ集落が幾つも出現し、大和王権の成立過程で なぜかよく判らないが、一斉に消えて行った。

	刀剣	鐵	工具	器具	炊器	他	小計	不明	総数	備考
阿蘇	83	388	500	258	213	61	1503	243	1746	
熊本	17	377	189	168	45	37	823	1068	1891	
佐賀	26	47	91	86	69	19	337	28	365	
高松	3	32	56	13	17	82	203	20	223	
高野	26	67	224	54	76	88	515	149	664	上寺地270
岡山	13	120	105	18	17	18	291	144	435	うち94点は県北部
兵庫北部	15	50	72	0	7	15	162	7	169	
兵庫南部	11	30	22	0	6	30	89	22	111	
京都北部	49	103	63	1	1	10	217	17	234	
京都南部	1	6	9	3	2	9	30	4	34	
大阪	3	22	19	3	14	16	57	68	125	

弥生後期の鉄器出土数
 (藤田肇司「見えざる鉄器」『究研』2002年9月を一部改変)



このベンガラ産地の村がなぜ 大量の鉄を持っていたのか

また、なぜ 大和王権の成立過程で これらの村が阿蘇谷から消えて行ったのか はまだよく判らないと聞きました。

また、手のひらに入る天草の砥石が大量に出土していることから、この地周辺の交易品として天草の砥石があったこと。砥石を握って 砥石の方を動かして鉄製品を磨いていたことも興味深い
ベンガラの産地 阿蘇谷で出土した鍛冶工房 やっぱり ベンガラの採取生産に大量の鉄工具が必要で、その供給基地だったのだろうか・・・

「 その出現と衰退は淡路島に出現した西日本最大級の鍛冶工房村

五斗長垣内遺跡の場合とよく似ているので、今回非常に興味を持って この講演会に参加した 」

と帰りのバスで一緒になった五斗長垣内遺跡発掘の淡路市教育委員会の伊藤さんから教えてもらった。
そして、この 11 月ふるさと発掘展「弥生の鍛冶（かじ）工房・五斗長垣内遺跡への道」の開催に合わせた 3 回の連続講演会とまとめのシンポジウムが行われ、五斗長垣内遺跡の位置づけなども議論されると。
ぜひとも、参加しよう。

もう 一つ 私のひそかな興味 「大量にこの地に存在するベンガラ原料・黄土が古代製鉄の原料になった可能性」
弁柄・黄土を還元すれば 鉄が取れる。 この数多くの鍛冶工房のどこかで、製鉄をやっていた痕跡がないだろうか???と聞いてみましたが、この阿蘇谷では見つからないと。 やっぱり ベンガラをそのまま製鉄原料に使う軒無理なのでしょうか・・・
(ただし、昭和の世界大戦 鉄不足の時 ベンガラが製鉄原料として 北九州に送られたと別の機会・資料で聞いたことがありました。)

10月31日 五斗長垣内遺跡への道展 連続講演会第1回に参加

前々から この淡路島 五斗長垣内遺跡が激動の弥生後期 卑弥呼の時代にどんな位置づけにあるのか 興味津々で
10月31日淡路島 北淡震災記念公園セミナーハウスで開催された第1回講演会 森岡秀人（芦屋市教育委員会）氏「鉄と青銅―近畿弥生社会における鉄器生産―」をも聴講しました。

長年 芦屋会下山の弥生の高地性集落の発掘に携わり、畿内の弥生時代研究の権威の一人で、早くから 畿内での淡路島の位置づけに着目しておられた森岡氏。 五斗長垣内遺跡がどんな性格を持つ遺跡として捕えるのか 一番お聞きしたかった人である。



「弥生の鍛冶工房・五斗長垣内遺跡への道」展が開催されている淡路島 北淡震災記念公園セミナーハウス

	<p>五斗長垣内遺跡は 淡路島の播磨灘に面した西海岸から約3km奥に入った淡路市黒谷の五斗長地区のなだらかな丘陵地の尾根筋の標高約200m台地の上 東西約500m 南北約100mに広がる弥生時代後期（西暦50～220年頃）の国内最古級この時期西日本最大の鍛冶工房村遺跡で、当初垣内遺跡と発表されたが、正式名称として、五斗長垣内遺跡と改められた。</p> <p>平成19・20年度に発掘調査が実施され、多数の炉跡を有する建物跡（鍛冶工房跡）が全部で17棟発見され、そのうち10棟が鍛冶工房跡で弥生時代後期国内最大級の「大鍛冶工房村」。</p> <p>建物遺構とともに鉄製品やその未完成品、鉄素材や鉄片 鉄器作りの石製工具類などが多数出土している。そして、この時期 この五斗長垣内遺跡と呼応するかのようには数多くの高地性集落が出現するが、この地も大和王権の成立過程で なぜか この五斗長垣内遺跡を含め、すべて消え去ってしまう。</p>
--	--



2008年発掘調査 (4)-3地区 主要部 2008.1.25.



現在の五斗長垣内遺跡 2010.10.31.

- SH-302 鍛冶工房跡(大型円形竪穴建物 少なくとも1回建替)鍛冶炉跡10 石槌 金床石 鉄製品12
- SH-303 大型鉄素材が出土した鍛冶工房跡(大型円形竪穴建物)鍛冶炉跡3 石槌 鉄製品5(内1は大型鉄製品)
- SH-304 鍛冶工房跡(方形の竪穴建物)鍛冶炉跡1 壁際で石槌・砥石・鉄製品1
- SH-305 円形竪穴建物 炉跡発見されず
- SH-306 鍛冶工房跡(竪穴建物 南半分が崩れ半円状で出土) 鍛冶炉1 鉄片1

参考 和鉄の道 弥生時代後半 国内最大級の鍛冶の村

[国生み神話の淡路島「垣内遺跡\(鍛冶工房跡\)」現地説明会 Walk](#) 2009.1.25.

鉄器が重要な役割を演じたといわれる古墳時代と大和王権の誕生へとつながる弥生後期の「大鍛冶工房村」と大きな話題を呼んだ遺跡である。しかし、五斗長垣内遺跡の位置づけ・性格付けについては 邪馬台国論争や纏向遺跡そして大和王権の成立と絡んでいるだけに なかなか即断はできず、まだまだ密な研究を続けねばならぬようだ。

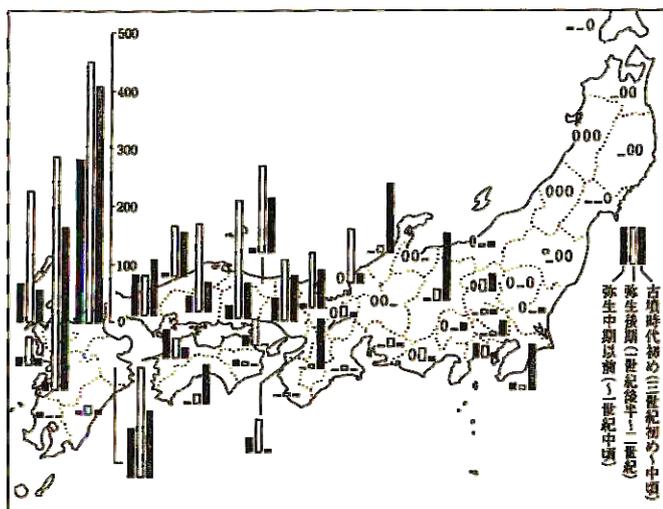
森岡氏は講演の中で

「この鍛冶工房の鉄器と交換された交易品が何か それを明らかにすることで この鍛冶工房の位置づけがはっきりするのではないかと?」 また、「これらの鍛冶工房や周辺の村が大和王権成立期に一斉に消えたのは ひとつに 鉄の全国的な流通の確立 があるのでは・・・」と話された。

引き続き この11月 連続講演会とシンポジウムがあるので これからどう展開するのか 楽しみです。

九州の阿蘇谷と近畿の淡路島で 縄文後期 時を同じくして 大規模な鍛冶工房を持つ村と周辺集落が存立し、そして大和王権成立の過程で 一斉に消えてしまう。 なにか 因縁めいている。

それにしても 「淡路島」が鉄と交換にほしかったものは いったい 何だったのだろうか それとも弥生の戦争か 本当に興味深く、その性格は一筋縄ではゆかないなあ・・・と。



地図1 県別に見た鉄器の出土数

鉄器は弥生時代を通じて圧倒的に北部九州に集中する。3世紀初めにヤマト王権が誕生してもいぜんこの傾向は変わらないが、東日本にも普及しはじめる。この直後、3世紀後半以降の定型的な前方後円墳からの大量の鉄器埋納によって九州と近畿の鉄器量は逆転する(寺沢薫氏による説明)。地図1は、川越哲志編「弥生時代鉄器総覧」(2000年刊)を一部時期補正して寺沢薫氏が作成



弥生後期 大量の鉄を集積した集落群があった阿蘇谷



弥生時代 日本各地の鉄器集積の変遷(インターネットより) 播磨灘を見下ろす 弥生後期の鍛冶村 五斗長垣内遺跡全景